

記念講演

講演：「スポーツの可能性」

一般社団法人アスリートソサエティ代表理事

為末 大 氏



〔略歴〕

スプリント競技における日本初の世界大会メダリスト。五輪はシドニー、アテネ、北京の3大会に連続出場。2012年に現役を引退。現在は、一般社団法人アスリートソサエティ（2010年設立）、為末大学（2012年開講）、Xiborg（2014年設立）などを通じ、スポーツ、社会、教育、研究に関する活動を幅広く行っている。

今日は、私の競技人生、そして、今現在の活動を通して、何か少しでも皆さんのお役にたてるお話ができればと思っております。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

■社会の問題をスポーツで解決する。

私が現役最後の30歳から34歳にかけて、それまでは必ず日本代表でいられたのですがなかなか勝てなくなった時期がありました。その頃、カリフォルニアのサンディエゴに僕はいて、幾つかおもしろい体験をしました。

一つは、サンディエゴのある区画、ここは移民や難民の方がたくさん住まわれている場所だったのですが、大体3キロから4キロ四方のエリアに100カ国を超える国から来られた方が住んでいるという場所がありました。かなりの割合の方が英語を話せず、そのエリアの中で起きている問題がたくさんありましたが、これをどうやって解決しようかと地域の方でいろいろ取り組まれました。何をやったかといいますと、その時には、そのエリアの真ん中に畑をつくりました。当然みんなで食べるものをつくりましょうという意味もあったのですが、何か一つのことをみんなで協力しないといけない共同作業をやることで、結果としてはコミュニケーションが生まれて、防犯・防災の観点でつなげていこうという取り組みでした。

実はその畑をつくるという活動と一緒に行われていたのが、サッカーの教室です。スポーツのク

ラブを運営することで、言葉はわからなくてもいろいろなコミュニケーションが生まれていくというような活動をされていました。それまで私の頭の中では、スポーツというのはとにかく一番になってメダルをとると、それだけがスポーツだというのがあったのですが、そこで初めて社会の問題をスポーツで解決するという取り組みが行われているということに驚きを覚えました。

もう一つは、サンディエゴのオリンピックセンターで僕がトレーニングをしていた時のことです。そこではパラリンピックの選手たちも一緒に練習していたので、僕は片足の膝から下が義足の選手とよく一緒に練習していました。

そこで何を感じたかということ、非常に関係がフラットだったということです。私が見た風景で一つ覚えているのは、成長が途中で身長が伸びないという症状の選手がいたのですが、彼がグラウンドに来て受付をしようと思ったら、届かない高さの受付だったわけです。自分の目線より高いところでサインを書かなければいけないのですが、届かないのです。そうすると、後ろから来たバスケットのメンバーたちが、彼と軽口をたたきながら、トレーニングのときに使うシートのようなものを持ってきて、それを下に入れていくわけです。3枚ぐらい入れてもまだ届かないのですが、だんだん入れていってようやく届いたということをおぼろげに覚えて彼らとやっていたのを見ていて、何を感じたかということ、「何て遠慮がないんだ」と思っ

たのです。

僕は日本で同じように障害を持っているアスリートたちが困っているのを見たら、すぐ助けなければいけないと、彼らに「何か困っていないか」、何かしてあげなければいけないのではないかという気持ちになっていたのですが、彼らも実際にはそういうことをするのですけれども、それ以前にアスリート同士の友情のようなものがベースにあって、信頼関係があるので、非常にフラットに触れ合っているという感じがしました。こういう空気というのはどうやって日本で作っていったらいいのか、様々な社会の問題をスポーツでどのように解決することができるのか、等を漠然と考えるようになりました。

今現在、僕は、子供たちに向けこの教室で教えています。うちのかけっこの教室は、走るのが余り得意ではないという子が実は多いのですが、足が速くなることでそういう子たちに自信を持ってもらうことができないかということをやっています。

もう一つは、手段がスポーツであり、目的は社会の問題であることということ意識しながら、2020年にパラリンピックの選手たちがオリンピックの選手より遠くに飛んでいるだろう、速く走っているのではないかと期待しながら Xiborg という義足の開発と選手強化をやっています。

これは何を狙っているかといいますと、確かにそういうことが起きたらおもしろいという側面もあるのですが、パラリンピックのヒーローがもし世の中に出てきたら、何か社会の障害に対しての意識が変わるのではないかと期待しています。

器具のレベルがどんどん上がっていけば、選手のパフォーマンスは上がると思いきや、やはりそれなりに使う側の力量もそれによって上がっていかないと、使いこなせなくなっていきますので、私たちは当然すばらしい義足をつくってこうと思って活動していますが、それを履く選手側のスキルというものもこれからどんどん求められていくのではないかと考えています。2020年に向けて私たちはとにかく義足を履いたパラリンピックの選手たちをヒーローにするという活動を今やっているのです。

■本当の限界は自分の思い込みが決めている。

私の競技人生の話をお話しながら、私がスポーツから学んだことを話させていただきたいと思えます。

超えることが困難な記録にひとりのアスリートがチャレンジした。何度も何度も何年も何年もチャレンジして世界記録を塗り替えた。するとどうでしょう。いままで、何年も塗り替えられなかった記録を次々と更新する選手が現れました。

このことをスポーツの世界ではどういう説明がされているかといいますと、人間の体というのは、僕らのような競技でも一生懸命やって限界に到達しているようでいて、本当の限界は何が決めているかということ、自分の頭の中にある思い込みが決められている。その思い込みというのは、大部分が周辺の人たちの平均値に影響される、もしくは前例に影響されるといわれています。つまり、「誰かができたのだったら、僕もできるだろう」ということ、「誰かが過去にやったことだったら、僕もできるだろう」ということなのですが、ほとんどのスポーツ選手というのは前人未達の何かを成し遂げたいということをお夢に描きますから、前人未達という誰もやったことがないことなのです。

選手たちは当然いろいろなものと戦って向き合っていくわけですが、一番厄介な敵というのは自分自身の思い込みということになります。この思い込みというのが一番厄介な点は、人間は「自分は思い込んでいるな」と思いながら思い込んでいるのではないのですね。「思い込んでいる」とは思いもよらないから思い込んでいるわけで、自分自身を縛っている思い込みや常識や、ふたをしている考えというのは何なのかということによりよく考えて、そこに対してアプローチをしたり、ないしは自分の限界を超えるようなトレーニングをするということが、スポーツでは非常に重要になっていきます。

私の競技人生というのは、長くいろいろなハードルを跳んできたのですが、最終的に一番私が向き合っていた厄介だったと思うハードルは、結局自分自身の自分に対して張っているレッテルだと思っています。こういうものとどう向き合うかということは、なかなか「こうやればいいよ」という手段はないのですが、今日の私の競技人生の話

の中では、この自分の中での勝手な思い込みとどうやって向き合うかという話が多いです。少しその中に自分なりにはやってきた工夫があったと思っています。

■最初のオリンピックから学んだこと

「気の緩みがあったんでしょうかね」なんて、あるわけないだろうという感じですが、オリンピックだとこのように言われてしまいます。これが私の人生初のオリンピックです。

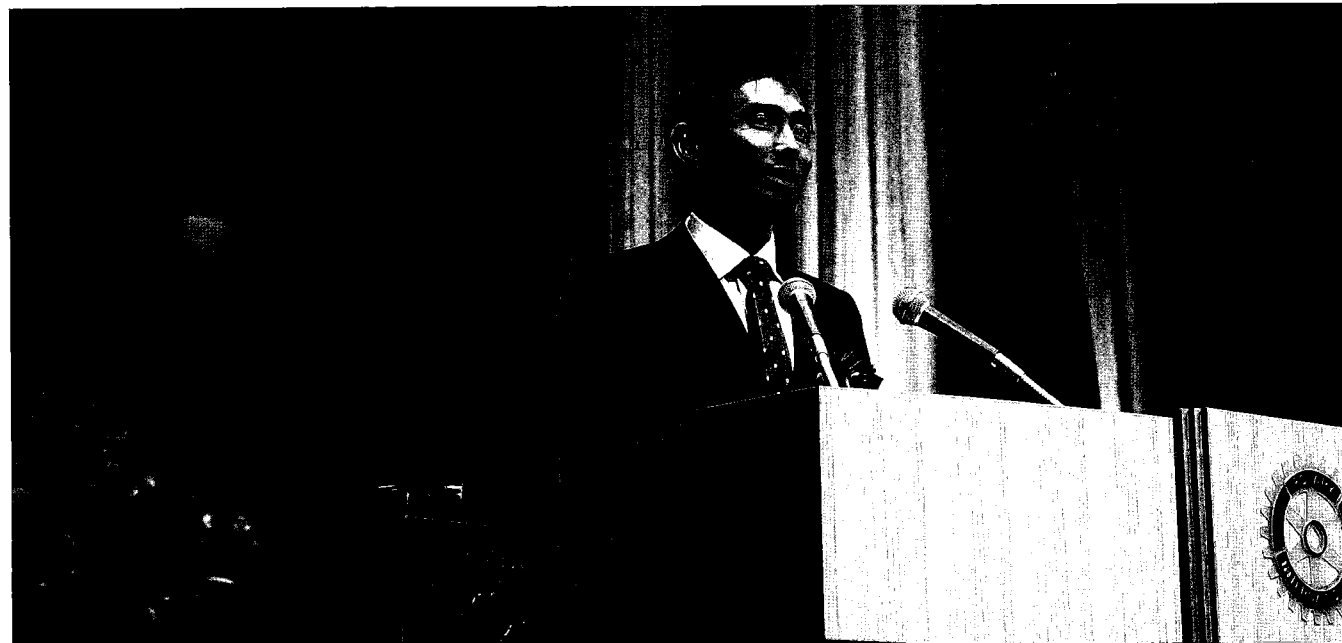
この経験というのは、私のこの後の競技人生に大きな影響を与え、自分自身を見失うという経験を初めてこの時にしました。それまでは、いろいろ厳しいレースはあったのですが、どこか自分のままレースがきちんとできていて、ピンチがあっても「ここをこうやってやればいい」ということを理解しながら走っていた感じがするのですが、このオリンピックのときは全く違いました。

レースが始まって、ほとんど覚えていないのですが、1台目のハードルを越えるというときに何と思ったかということ、「いつもと様子が違う」ということを思いました。「いつもと様子が違う」と思ったのですが、何がいつもと違うのかはわからないわけです。そうすると、何がいつもと違うかわからないので、どうすれば元通りに戻るのかもわからない中で、ハードルとハードルの間は、大体我々は3.6秒ぐらいで駆け抜けますから、3.6秒後にはもう次のハードルがやってくるわけです。

そういう状況の中でもう一回跳んでみると、やはりいつもと何か違うわけです。これを2台、3台、4台と繰り返していきますと、最初のうちは小さかった違和感がどんどん大きくなっていきまして、最終的には9台目のハードルを越えるときに、もう自分がどこを走っているのか、ハードルと自分の関係がどうなっているのかよくわからないまま、気がついたら自分の足をぶつけてしまっていて、転倒したというのがこのときのレースになります。振り返ってみて、自分でもよくわからないというのがこのレースの正直なところなのですが、自分でも感触すら得られないまま終わってしまったというのが私のオリンピックでした。

日本に帰ってきまして少し落ち着いたときに、それでもレースのことを振り返らないと結局次に進めないということで、レースの映像を何回も見てみると、気づいたことが2つありました。一つは外国人選手、特にカリブのほうの選手と僕はこのレースを走っていたのですが、彼らのペースが少し違ったのです。具体的にいきますと、日本人はスタートから走って行って、最初のコーナーでものすごくスピードを上げます。ここから先というのは、何とかスピードを維持しながらゴールまでもたせるというような練習の仕方をやっています。

ハードル競技で非常に重要なのは、ほかの選手がどう走っているかに惑わされないで、かつ風がどちらから吹いてくるかということも計算に入れ



ながら、自分の体力が今どうかということも考えに入れながら、いつもと同じ場所にいつもと同じように足を置いていくということが重要な競技になるのですが、このときには冷静さを見失って、しかも風にあおられているということは経験上わからなくて、自分が置いている足がどこに行っているのかよくわからないままレースを終えてしまったというのが原因だろうと自分で結論づけました。

では、この2つの問題、外国人選手と走り慣れる、それから風が吹いたり、いろいろな荒れた環境の中で力を出すということをするにはどうしたらいいかということ、結局経験しかありません。厄介なことに、この2つというのは日本で手に入らなかったのです。外国人選手は日本のレースにそんなに出席せず、日本の競技場というのはきれいにつくってあって、そんなに風が強く吹くところもありません。そういうことを考えていくと、結局世界に出なければいけないということを決意しまして、世界に出るという選択をしました。

■イップス！の克服

何とかエージェントを探しあて、飛行機やTGVを乗り継いで8日間で4カ国を回りましたので、移動する、走る、移動する、走るという感じで、もう必死でやっていました。いろいろなよいことももちろんあったのですが、一番の経験は、何かトラウマに近い形で、大勝負で手ひどい失敗をしたときに、そのプレーをするときに心理的にブロックがかかってうまくできないという症状、つまりイップスを克服することができたことだと思います。

僕はハードルを跳ぶときに、転倒したショックからかわからないのですが、構えてハードルを跳ぶというくせがこのときについてしまいました。走っているときも自然で、一見、見た目はハードルをきれいに跳んでいるように見えるのですが、きちんとタイムでとっていくと、ハードルの前でプレーキをかけて跳ぶので、やはりタイムがどうしても落ちてしまっているのです。これを何とか治したいと思うのですが、ハードルを意識しないで跳ぼうと思うときに、もう既に頭でハードルのことを意識してしまっているわけです。意識しないで跳ぶということは非常に難しいと思いました。

スポーツのイップスや高いレベルでの難しい点は何かということ、スポーツの前半はどうやって覚えていくかという勝負になります。たくさん反復して、できないことができるようになっていって、覚えていく作業なのですが、高いレベルに入ると、忘れる作業のほうが難しくなります。失敗したときをどうきれいさっぱり忘れて、もう一回挑むことができるようになるかということです。気にしていることをどう気にしないで走ることができるかという、自分の意識のコントロールができないと、なかなかうまくいかなくなってしまうのです。何しろ、高いレベルになると、ほとんど負けていることのほうが多くなるので、そうすると一つ一つに意識を置いていたらとてももたなくなっていくので、どうやってきれいさっぱり忘れて後ろに流していくかということが大事になります。

このときに私にとって何がよかったかといえますと、外国に初めて来て、自分のわからない状況で、あしたはどの国に行くのかわからない状況で必死でやっていると、気がついたらパリのときに、自分が何も考えないでハードルを跳んでいたということに気づくわけです。それどころではなかったのです。ゴールを見て、横に速いやつもいるし、必死で走っていると、気がついたらハードルを越えていました。1回それで何も考えずにできたという認識が自分に生まれると、次からはそんなにこだわりがなくなってきて、だんだん自然に跳べるようになります。

やはり人間は、忘れたことを忘れるためには、それどころではなくなる状況をつくると、つまり何か別のことで頭がいっぱいになるということが非常に重要なのではないかということが、私がこのときに得た学びだったと思います。

その後、世界陸上で初めてのメダルを取ることができました。オリンピックのときにはオリンピックで失敗したということしかなかったのですが、メダルをとると、急にこのメダルとあの転倒というのが結びついてくるわけです。自分の頭の中でも当然意識はしていたのですが、世の中でも結びついてきて、あのメダルをとるためには、あの失敗は必要だったという、全体で解釈されるようになるわけです。選手たちというのは、どうしても試合で勝った、負けたというので一喜一憂しがちなのですが、振り返ってみると、結局そういうも

のは結果論に過ぎなくて、選手にできることは今どんな姿勢で生きるかという点しかないわけです。過去をどのように後悔しても、未来をどのように憂いても、結局選手というのはトレーニングすることによってしかでき上がりませんから、日々どんなトレーニングをどういう意識でやるかということだけに集中することが重要だと思いました。

この後に私は案の定というか、スランプにはまり浮いたり沈んだり、結果というのはある程度時の運ですから、それよりも自分自身が今、それから何を学んでどうやっていくかということが重要なのではないかということがこのときに感じたことでした。

■自分自身の有限性

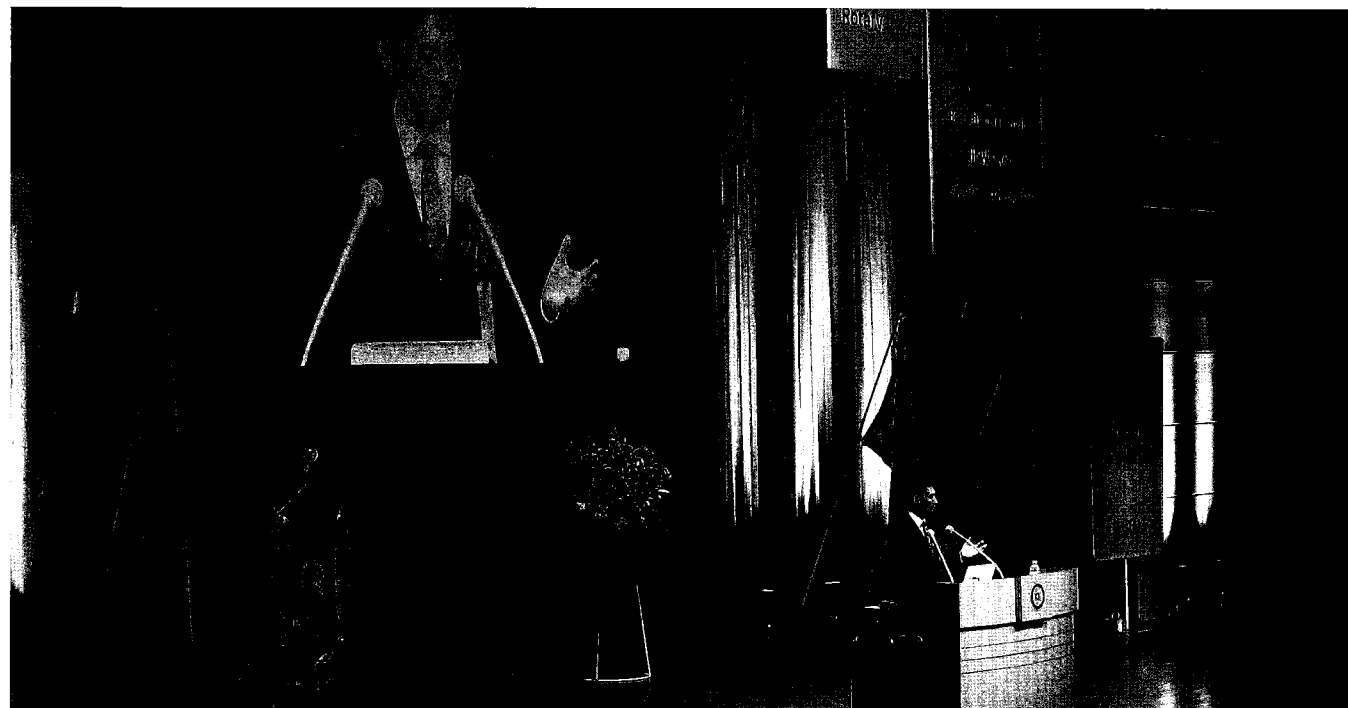
私はそれまで、競技人生というのを大きくとらえて、やはり日本人が誰もやったことのないことをやろうという意識がありました。メダリストというのは短距離ではいなかったということで、何とか日本人初のメダリストになろうというのでやっていました。その当時のイメージは、とにかくそこまで行けば、何となく自分の人生というのは開けていくのだろうというイメージで頑張っていたのです。実際にメダルをとりました。

想定しているよりも早く、23歳でとったのですが、そこまで行ってみると、どんな風景だったかということ、イメージで行けば、富士山頂を目指

して一生懸命頑張ったのですね。富士山の山頂までやっと来たと思ったら、今度はその向こうにもっと高い山がそびえていて、スタート地点ではいなかったギャラリーがたくさん周りにいて、みんなが「頑張れ」と言うので、一休みしようと思っていたのに、休むわけにもいかないということで、次の山を登り始めるわけです。

でも、この山のきつさというのは、前の山と少し質が違うのです。何が違うかということ、前の山には「おれは絶対にあの山に登るんだ」という理由も目的も全部ははっきりしていたのですが、次の山は何を目指せばいいのかということ、なぜ目指すのかということが腹に落ちていないまま登り始めるわけです。こういう状況だと、やはりどうしてもつらくなっていきまして、だんだんモチベーションが落ちると同時に、競技力も落ちていってしまいました。

当時の日記を見ると、それまでは「この試合で勝つぞ」とか、「こういうタイムを出すぞ」とか、「あしたはこの練習をするぞ」ということを書いてあるのですが、この頃の日記は「この試合で負けてはいけない」とか、「この練習をしなければいけない」とか、そういうことが非常に多く書かれているのです。選手は自分がなれそうだというものより世間の期待が大きくなると、だんだんその間に義務感というのを感じるようになっていきます。これに強い選手ももちろんいるのですが、私の場合は余り強くない上に、次の目的を何にすれ



ばいいかというのを見失ってしまっていたというのもあって、非常に成績が停滞してしまいました。

もう一つ問題があったのは、有名になりたいと思って競技をやっていたのですね。「陸上競技しかおれにはないんだ」ということでやってきたのですが、このぐらいになると、陸上競技でヨーロッパで一生懸命試合をしてされる報道よりも、日本に帰ってきて、シーズンオフに出るバラエティー番組のほうが露出が大きいわけです。「こっちのほうが簡単じゃなか」というようなことを考えてしまうわけです。今考えればこの違いがわかるのですが、当時は自分は何のために陸上競技をやるのかということがよくわからないまま、結局自分のモチベーションと競技レベルというのが一緒になってしまって、どんどん成績が落ちるといのがこのときでした。2年から3年ぐらいスランプにはまってしまうました。

このときに私の父親が食道がんになりまして、半年間の余命宣告をされて亡くなりました。一番身近な父親、親族が亡くなるというのは初めてだったので、父親が亡くなってしまふ、かなりの確率で助からないという状況で、半年間それを見ながら過ごしていたのですが、結局半年後に亡くなってしまいました。そのことを自分が受け入れるという作業がありながら、もう一つ、7月に父親の葬儀が終わって、その後世界陸上がありまして、それに出席しまして予選で敗退して、日本に戻ってきたときぐらいからだんだん自分の中で浮かんでくる考えというのがありました。

それは何かというと、「父親が死ぬということは、僕もいつか死ぬんだな」ということです。いつかはわからないし、すごく長生きするかもしれないのですが、とりあえず永遠に行き続けることはないということをそのときに思いました。有限だということに気づきまして、僕らの場合は人生の有限性よりも先に、競技人生というのが有限です。これも後からやりたいと思ったり、後で何とかしたいと思っても、もうできなくなってしまうというのが、陸上競技はこの人生の前半部分でしかできないということに気づきました。

■「やり切る」というエネルギー

エドモントンから数えて4年ぶりに世界大会の決勝に残ることができました。準決勝で僕は8番

目の通過なので、一番遅いタイムではあったのですが、そんな中で何とか決勝に残ったというレースで、私が2回目にメダルをとったときのレースになります。決勝は8人しか走れないので、8番目で通過すると大体一番後ろか、頑張っても6番、7番という順位になるのですが、逆にそれがよかったのは、途中で転んでも何をしても、絶対8番にはなれるわけです。だったら、メダルをとる可能性のあることができないかと考えました。準決勝が終わってから決勝が始まるまでは48時間以上空けなければいけないというルールがあります。ですから、48時間の間体を休めながら、どうやったら番狂わせが起きるのかということをやっと思っていました。当然なかなかいい案は思いつかないわけです。柔道やサッカーであれば、相手に技をしかけてできるのですが、陸上は相手に触るといこともできないし、何か相手に対して影響を与えることが極めて小さい競技です。

それでも、当日の朝起きたときに、雨が降って、風がとて強かったのです。それを見ていたときに、結局私が何を思い出したかということ、シドニーオリンピックのときの経験です。こういう悪天候のときに自分の経験がもしなかったとしたら、いつもと同じではないわけです。少しずつです。ベテランであればそのずれをその都度修正できるのですが、若い選手というのはこのほんの少しの違和感、ほんの少しのずれというのがほころびになって、それから崩れていくということはよくあります。何とこのときの決勝に残った選手のうち6人の選手が、これが初めての世界大会の決勝でした。僕と最後に競った選手は19歳の選手です。

何をこのときに思ったかということ、だったら何とかしてこの決勝で若い選手に違和感を持ってもらえないかということを考えるわけです。どうすれば違和感を持ってもらえるのかということを考えていったときに、結局私がそのときにやったことは、ハードル競技というのは、途中で相手に触ることでの影響は与えられませんが、視覚的には影響を与えられます。スタートして45メートル地点に1台目のハードルがあるのですが、これを跳び上がる瞬間に、前の選手が自分よりも先に跳ぶと「出遅れているな」、相手より自分が先に跳ぶと「リードしているな」といのが目で見てわかるようになっていきます。

若いときには自分の体感のスピードがほとんどで、体でわかるものがないので、そうすると前の選手との距離加減で、自分が今速いペースで走っているのか遅いのかというのを判断しがちなのですが、このときはスタートから1台目のハードルまでだけ思いきり走りました。ふだんより0.2秒ぐらい速く僕は走ったのですが、幸い7レーンにいたので、内側の6人の選手は僕の背中が見えるという状況で走っていました。歩数にして半歩ぐらい速く僕がハードルを跳ぶということになるのですが、それを見た後ろの選手たちが出遅れたという違和感を持ってくれないかという一点に希望をかけて走ったわけです。どうせ途中でへとへとになっても8番なので、もとに戻っただけということで、結局これがうまくいったかどうかはわかりませんが、ほとんどの選手が準決勝のタイムより落としてしまいました。金・銀・銅の選手だけが準決勝よりも速く走って、私が銅メダルになったというのがこのレースでした。

冒頭に話しましたが、結局何か壁を打ち破っていくときに、最後のほうは理屈ではなくなってきて、「やり切るんだ」というエネルギーしかないわけです。でも、自分は何に最もパッションとかエネルギーをつぎ込めるタイプなのかということ、最後のほうは探りながら競技をやっていました。

これは私の現役時代の最後のほうで特に大切にしていた言葉なのですが、孔子の言葉になります。

「これを知る者はこれを好む者に如かず これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」という言葉になります。知っているよりも好きになっているほうが強いと、そちらのほうが上手になるということ、下の段は、好きよりも楽しむということのほうが上手になると書いてあります。上の段はよく皆さんが聞かれます「好きこそものの上手なれ」といのであるのですが、下の段というのは余り聞かれないと思います。好きと楽しいの違いは何だろうかということ。

私の解釈で、2つ理由があると思っています。一つは、好きというのは対象物に依存します。例えば、私は餃子が好きなのですが、餃子を食べないということはあったとしても、嫌いになるということはありません。反対に、嫌いなもの、例えばピーマンが嫌いだったとしたら、ピーマンが好きになるということはなかなか難しいわけです。人に対してもそうだと思います。好きな人は好きだし、嫌いな人を我慢するということはできても、嫌いな人を好きになるというのはなかなか難しいと思います。

ところが、楽しむということは、どちらかというと自分の姿勢の問題になってきます。当然、何をやっても全然楽しくないというときもあると思うのですが、何とかこの状況を楽しもうとすれば、それなりにピンチの状況でも楽しみを見つけたりするわけです。この楽しさというのはある程度自分で習得可能な資質になってくるのではない



かと思えます。楽しもうとしていくということが僕の競技人生の中では、結局ピンチを切り開くときも、自分自身が何かを打ち破るときも、いろいろな苦しいことはあるのですが、ベースにそれ自体を楽しんでいたというのが、非常に大きなエネルギーだったと思うようになりました。

■社会的パワーの喪失

選手にとっては、モチベーションはいろいろなものに置いて、「勝つことが大事です」と言う人もいますし、いろいろなものがあると思うのですが、私はとにかくこの楽しみを見出すと、どんな苦しい状況でも楽しみを見出して、自分をわくわくさせることで、自分を鼓舞して勝利に向かっていくというのが私にとっては非常に大きなものだったと思っています。

メダルをとったのが27歳のときになりますが、その後34歳までもう一発当ててやりたいと思いながら、結局競技人生の間で僕は1回もいいパフォーマンスをできずに、最後は若い選手にも勝てなくなって引退していきました。特に最後、1回でもスポーツ選手でチャンピオンになった人間は、競技場に行くときに自分が勝てなくなってくると、パワーが失われるということを感じます。ここで言うパワーというのは、自分自身の体のパワーのことではなくて、社会的なパワーです。競技場に入った瞬間に、こちらを振り向く人の数が少なくなるのです。それで何くそと思うのですが、結局勝負の世界ですから、勝っている選手のほうにスポットライトが当たって、みんながそっちにわっと寄っていきます。そこで傷つきながら、「それでも自分は競技をやるんだ」、「もう一回頂点をとるんだ」という思いでやるのですが、それがうまくいかないというもどかしさで最後の4年間は競技をやっていました。

ある試合で、これが引退から2試合前の試合になるのですが、結局僕は勝てずに代表を逃しました。人生で初めて代表を逃した日本選手権だったのですが、点を見上げて「もうこれでおれはおしまいか」という思いと、ほんの少しだけ「まだおれでもやれるのではないか」という思いでふとスタンドを見ると、おじいちゃんが「頑張れ、為末」と書いた紙を掲げていたのです。僕はそれを見て初めて自分が応援されているということ、それ

までは自分の競技で精一杯というか、そこしか興味がなかったのですが、「自分は誰かに応援されていたんだ」ということに初めて気がついたのです。

その頃から少しずつ、引退はその後1年後にはしてしまうのですが、もしかするとこういうスポーツというものは、誰かに勇気を与えたり、ないしは挑戦するというは仮にそれがうまくいく、いかない、大きなこと、小さなことに関係なく、周囲の人間に勇気を与えて、挑戦を増やすということがあるのではないかと思うようになりました。

僕は野茂英雄さんが大好きで、陸上界の野茂英雄になろうと思ったら、世界一になれば誰もできないと思ったことができて、みんなが後に続くのではないかと思ったのですが、結局3番で終わってしまいましたけれども、そういうプロセスの中に感じてくれた人がいて、それには一応意味があったのではないかと思いました。

引退することになって、もう自分自身がスポーツの世界において中心になるというのは難しいですが、今は若い子供たちの挑戦、それから現役選手たちの挑戦の後押しやサポートをする、またはパラリンピック選手たちの挑戦のサポートをすることで、社会に挑戦と勇気というのが連鎖することのお手伝いができないかと思って活動しています。

2020年に東京にオリンピック・パラリンピックがやってきますけれども、これをどうやって日本オリンピック・パラリンピックにして、僕は地方に行くことも多いので、地方の子供たちが「自分たちもやるんだ」という夢を持ったり、「挑戦するんだ」という力を持てるような循環をどのようにつくればよいかということを考えています。こういうものはスポーツ界だけではできないものだと思いますので、社会全体で、スポーツだけではなくいろいろなものに、若い世代に限らず挑戦していくという文化をつくっていきたくと思っています。

長々とお話をしましたけれども、何か皆さんの学びに少しでもなったらいいかと思って、今日はお話しさせていただきました。どうもありがとうございました。